

# パーソンズの子ども社会化パラダイムの検討

## A Critical Examination of Paradigm on Socialization of Children by Talcott Parsons

(2005年3月31日受理)

高旗正人  
Masato Takahata

Key words : 社会化, AGIL, 社会統制, 学習のメカニズム, パーソナリティ構造, 家族崩壊

### 要 約

1970年代に起こった社会学のパラダイム転換の議論は現在においても理論上の結論に至っていないように思われる。本稿の目的は、子ども社会化という地平において両パラダイムがどのような関連にあるのかを検討しようとするものである。そのために、規範的パラダイムの中心をなすタルコット・パーソンズの子ども社会化パラダイムを解析し、それと対比するかたちで、最近の解釈的パラダイムによる子ども社会化研究を検討した。その結果、規範的パラダイムは、ある社会体系に制度化された価値志向の個人への共通内面化を説明し、解釈的パラダイムは、社会に対して同調行動をとる個人の内面は、必ずしも同一でないことを浮き彫りにするものとして特徴づけた。そのことから、パラダイムの転換ではなく両パラダイムの併存の価値を指摘した。

### はじめに

パーソンズ (Talcott Parsons) は彼の研究業績中重要な位置を占める著書『家族：社会化と相互作用過程』において、子ども社会の構造と社会化機能の分析のためのパラダイムを展開している。本書は、パーソンズにとって、子ども社会化過程の分析を行うことと同時に、彼のAGIL図式の適用範囲の拡大、とりわけ小集団への適応可能性を検討するという意味があったことは明らかである。むしろ、1953年にR.F.ベイルズとの共同研究で再構築した行為の理論 (AGIL図式) の成果を家族集団の解析によって検証しようとするのが主たる眼目であったと考えられる。<sup>(1)</sup>

1951年の『社会体系論』や『行為の総合理論をめざして』においては行為の総合理論とは名ばかりで、パーソンズの展開した理論は国家や比較的大きな集団のみを対象としており、小集団の分析はほとんど手づかずにされ

ていた。この点にたいして、同じハーバード大学の小集団研究を専門とする若き研究者R.F.ベイルズからの批判を受けた。パーソンズは若き批判者ベイルズ (Robert, F. Bales) との共同研究を行い1953年には共著で“Working Papers in the theory of Action”を発刊した。ここでは、有名な12のカテゴリーと呼ばれるベイルズの相互作用過程分析のための概念図式とパーソンズ社会構造分析のための分析用具、五組のパターン変数や社会化・社会統制の過程分析のための枠組みなどの概念上の調整が行われた。<sup>(2)</sup>このような、ベイルズとの共同研究の中から生まれた新しい行為の理論の中核をなすのがAGIL図式、ないしはAGIL理論と呼ばれるものである。

AGIL図式は小集団レベルから国家社会レベルまで適用可能な理論となるようパーソンズとベイルズとの概念の調整がなされたものである。この適用可能性を検討するための対象とされたのが家族集団であった。全体社会の機能的下位体系として家族集団はいかに機能しているか。

とりわけ、子どもの社会化機能に焦点を当てて検討したのが本書である。パーソンズのメタ分析は、当時の社会学、社会心理学、精神分析学の概念をAGIL図式の中に取り込みながら展開される。

その、子ども社会化分析は、子どもの置かれた「家族」という状況 (situation) の意味を体系的に明らかにするために、現代において再検討するに値する理論である。現代の子どもたちが置かれている「家族集団」の構造や機能が、かつてパーソンズ理論の背景となった社会と比較して、いかに変化したか、それが社会化研究の方法論や理論をどのように変容させるか、を明らかにすることは、現在の家庭教育問題や子どもの逸脱行動、保護者の行動などの解析にあたって重要な研究となるであろう。

## I AGIL図式の中の子ども

### 1) 社会化とAGIL図式

パーソンズが子どもたちとの関連でAGIL図式を持ち出したのは、社会化の過程への適応可能性を検証する目的のためであった。パーソンズの気持ちを正確に述べれば、AGIL図式は子どもの家族集団という小集団における社会化をどのように解析することができるか、ということが彼にとって最大の関心事であった。ベイルズとの共同作業『行為理論に関する作業論文』で明らかにした心理療法、社会統制の過程を、子どもの社会化としてどう整理するかをメタ理論的に考察しようとするところにパーソンズの家族論の一つの大きな目的があるとみてよい。

社会化は社会統制や心理療法過程と同じようにパーソナリティの構造変動にかかわる学習過程である。AGIL図式ではL-I-G-Aの逆回転の位相運動として位置づけられる。社会統制 (social control) の四類型は、それぞれ許容 (permissiveness)、支持 (support)、相互作用の拒否 (denial of reciprocity)、報酬の操作 (manipulation of reward) の順序でLIGAに配属される。この社会統制の過程は元々はパーソンズ自身が受けた心理療法を一般化したものとされる。すでに同様の用語は、1951年発刊された『社会体系論』に認められるが、AGIL図式に整理されたのは1953年の“Working Papers”以降である。<sup>(3)</sup>このような基礎的作業の後、

子どもの家族集団における社会化の過程がAGIL図式となる。

家族集団に生を受けた子どもが遭遇する状況と心理状態をLIGAの順序に整理して、パーソンズは記述してみせる。子どもの心的状態の記述には、フロイトの精神分析学の概念を使用している。口唇期-肛門期-エジプス期-青年期というフロイトの重視した発達位相は、すべて子どもの心的状態の不安定な時期である。それは、社会的な生活世界に対しては反抗的であり、一般に反抗期と呼ばれる。また、子どもの精神的発達という観点に立つならば、次の段階への飛躍の時期である。それはまた教育・社会的処遇のもっとも大切な時期でもある。適切な保護者の処遇によって、子どもを次の安定した心的ステージに導くことができる。パーソンズは、この不安定期をAGIL図式の外枠に位置づける。(図1-1 社会化と社会統制 参照) パーソンズの発達・学習観は「連続観」ではなくして「非連続観」であるといえる。社会化という概念は「社会化する者 (socializer)」と「社会化される者 (socialigee)」との相互作用として成立する。「社会化する者」から「社会化される者」への働きかけは社会統制 (social control) とされる。その社会統制は社会化される者の側からすると裁定 (sanction) としてとらえられる。社会統制も裁定も一般的には否定的概念としてとらえられがちであるが、パーソンズの場合は肯定・否定両面を持つ概念である。「許容 (permissiveness)」と「支持 (support)」は肯定的裁定であり、「相互作用の拒否 (denial of reciprocity)」と「報酬の操作 (manipulation of reward)」とは否定的裁定である。

パーソンズが、新生児の時期は肯定的裁定が相対的に多く、子どもが成長するに従って否定的裁定が増すと考えていることは、AGIL図式の位相運動が物語っている。

AGIL図式にパーソンズは「学習-社会統制過程の位相」及び欄外の「移行の危機」に加えて「心理-性的発達の位相」を書き込んでいる。その位相については便宜上、分けて示すことにする。(図1-1 社会化と社会統制、図1-2 役割の内面化と位相の関連 参照)

2) 核家族の役割構造とAGIL図式

i ベイルズ理論とAGIL図式

有名なベイルズの12のカテゴリーには小集団の相互作用過程を分析するため2つの側面、つまり課題を解決しようとする手段的側面 (instrumental) と集団内の緊張を管理しようとする表出的側面 (expressive) とが、それぞれ6つずつのカテゴリーで用意されている。このカテゴリーは「相互作用過程分析」のための用具であり、分析結果は時間の経過に伴う発言内容の違いが認められた。それを一般化したのが行為空間の位相運動論である。

課題達成を目指すあらゆる集団の相互作用過程は「問題の明確化」→「目標達成」→「集団の統合」→「潜在」という4種の位相運動を繰り返すことで自己維持と境界維持とを確保し集団として相対的な独立性を持続するとして、一般化された。これがさらに、集団の4つの構造・機能として一般化されるとき、「A適応」「G目標達成」「I統合」「L潜在」と呼ばれるようになった。パーソンズ・ベイルズのAGIL図式は、小集団から大集団まであらゆる集団の構造と機能を説明することの出来る理論的枠組みとして整備された。さらに、パーソンズの型の変数 (Pattern variables) や社会統制・社会化の図式と組み合わせると、社会統制や社会化の過程は課題達成の過程とは逆方向L-I-G-Aの位相を辿ることが明らかになった。(図1-1 社会統制・社会化の図式及び図1-2 役割の内面化と位相の関連を参照)

パーソンズとベイルズの編著書『家族：社会化と相互作用の過程』はこのようにして出来上がったAGIL図式が家族という経験的な小集団の構造 (役割構造) と機能 (子どもの社会化) とを説明することが出来るかどうかを検証しようとしたものだといえる。

図1-1 社会化と社会統制

	A	青年期	G
口唇期	報酬の操作	相互作用の拒否	エジプス期
	許容	支持	
	L	肛門期	I

図1-2 役割の内面化と位相の関連

A	成熟期 (ゼニタリティ期: 8-16対象体系)	G	潜在期 (4対象の家族役割体系)
L	口唇依存期 (母子一体性)	I	愛情固着期 (両親-自我対象分化)

ii 家族の役割構造

パーソンズは図2-1, 図2-2に示した核家族の役割のように父親 (課題遂行・力の優位)・母親 (集団管理・力の優位)・男児 (課題達成・力の劣位)・女児 (集団管理・力の劣位) の役割を分類する。この図式については、AGIL図式との関係は述べられていない。しかし、男性 (左側) を手段的優先性: 課題遂行優位, 女性 (右側) を表出的優先性: 集団管理 (統合) 優位となることは明らかである。また、集団における役割の外部へ向かう役割と内部に向かう役割とを区別するとき、男性は「外的」女性は「内的」とされる。世代の上下は力の優位と劣位である。このような性と世代を分類軸とするやり方の正当性を、同じ書のゼルディッチの研究によって根拠づけている。ゼルディッチ, Jr. は56にのぼる民族の家族役割を調査した結果、ごく一部の発展途上国の例外的な種族を除いて男性は主として生産活動 (外的・手段的活動) に携わり女性は家政 (表出的・内的活動) を受け持っている。その結果からパーソンズはこの役割構造図は正当化できると考えた。

図2-1 核家族の分化

		男性	女性
世代	上	父親	母親
	下	男児	女児

図2-2 核家族の役割

道具的優先性	表出的優先性	
道具的優位 夫(父)	表出的優位 妻(母)	優位
道具的劣位 息子(兄弟)	表出的劣位 娘(姉妹)	劣位

日本においても、江戸時代から「髪結いの亭主」はいた。女性が収入を得て一家の家計を支え、男性は子守と家政を行うことは現実にはいつの時代にも存在するであろう。パーソンズがジェンダー論者などから批判される所以はここにある。パーソンズの理論は一般理論 (general theory) といいながら、ある特定の社会集団の現実 (それが多数とはいえず) に依拠して構想された理論であることは間違いのない事実である。

天動説が農耕を中心とした社会では何ら違和感無しに通用したのにもかかわらず、航海が盛んになると説明できない事実が多発して地動説にパラダイム転換せざるを得なかったように、理論のもとになった社会的事実ないしは社会的・文化的現実が、時代の流れの中で変化してくると社会学理論も変質しなければならないであろう。この問題は、本論のIIIでやや詳しく取り上げることにする。

## II 社会化の分析

### 1) 学習のメカニズム

パーソンズは子どもの社会化が自分を取り巻く社会的役割の内面化から始まると考えている。したがって、新生児の時期から始まる子どもの社会化にとって、もっとも大切な社会構造は子どもが養育される家族集団の役割構造とすることになる。(図2-1 参照)

子どもが生物学的人間から社会的存在としての人間になる社会化過程にはモデルが必要である。そのモデルは家族の役割構造である。(図3 家族と母子同一化 参照) パーソンズは社会化される者の内部で働く学習のメカニズムを3種類に分類する。3種類とは、発明 (invention)、模倣 (imitation)、同一化 (identification) という3

者である。

発明とは、すでにパーソナリティに内面化されている文化によって思考し新しい行動様式を作り上げていくメカニズムである。文化といえは高度な文化を考えがちであるが、乳幼児は乳幼児なりに思考し、新しい適応行動を創造する、これが発明である。

模倣とは言葉の通りまねることである。学習し文化を内面化する際に働く重要なメカニズムである。パーソンズの場合は、技術、技能面の学習のメカニズムとして位置づけている。小学校の表現領域つまり音楽、図画工作、体育などの技術の習得は「おてほん」をまねすることから練習を始めることがしばしばである。幼少期からはじめられる楽器の演奏などは範奏が重要視されるのはそのためである。おそらくあらゆる年齢において内容はもちろん異なるけれども模倣のメカニズムが働いているのではないかと考えられる。子どもたちには父親の行動様式、母親の行動様式をほとんど無意識に取得している。模倣のメカニズムによるものである。

同一化のメカニズムは言葉の通り「他者と同じになること」である。同一化には、「他者と同じになりたい」と考える「発達同一化」と他者に対決して他者を凌駕するために「同じ力を所持」しようとする「防衛同一化」とがあるが、パーソンズの場合は前者のニュアンスが主である。他者が好きで他者と一緒に居たいないしは、尊敬する他者と同じになりたいと考える同一化である。

これら三の学習のメカニズムによって、子どもは自己と他者との役割関係を内面化し自分の行動様式を社会に適合するものへと作り上げていく。

人間の社会化はいつから始まるか。子どもは母の胎内にいる時期から始まっているという考え方はかなり一般的である。我が国の胎教の思想もまた出生前の社会化の出発を意味するものといえるであろう。遺伝か学習か議論が分かれるところではあるが、経験的に音楽的資質たとえば絶対音感などは生前の体験・体得によって出来上がる部分が少なくないようにも思われる。

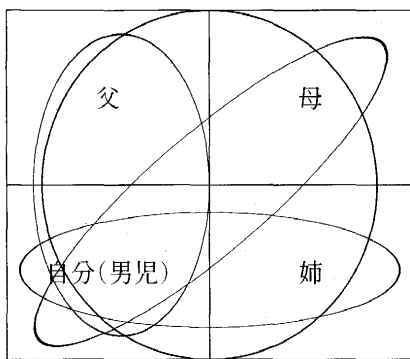
パーソンズの役割取得による社会化は出生後の他者との相互作用から始まると考えてよい。パーソンズは社会化の概念にフロイトの精神分析的知見の多くを取り入れている。まず、母親の胎内にいる時子どもはもっとも安定した状態にあると見なされる。人生のずっと後になっ

て心に描く理想郷の原型は、じつはこの時期の体験の想起に他ならないとも考えられている。

しかし、この理想郷から離別しなければならない時がやってくる。出生と同時に新生児は呼吸も栄養の補給も臍帯に替わって自らの口唇を通じて行わなければならない事態に置かれる。

この事態は新生児にとって未だ行った経験のない行為を要求されることである。いわば自動的に補給されていた栄養物は食物として、自らの口からの吸飲・給食行為を要求されるわけである。その行為の一部は本能として遺伝されるが大半は学習によるとされる。そのことから、子どもは、学習しなければ食事にもありつけないということで、出生と同時に口唇が危機的事態に遭遇する。これは、「図1-1 社会化と社会統制」の枠外左の「口唇危機」で表されている。しかしこの事態は早々に克服されて、出生後第一段階の安定期に移行する。

図3 家族と母子同一化



## 2) 社会化の段階

### i 一単位パーソナリティ

第1の安定期は口唇依存期である。(図1-2のL参照)。生まれて間もない子どもに対しては、一般には規則的に授乳が行われる。我が国の場合でも、新生児に対して3時間ごとにミルクを与えることが指導される。空腹の周期にピッタリ合致した栄養補給によって、子どもは安定した心理状態に置かれるであろう。この段階での子どものパーソナリティ構造を、パーソンズは一単位パーソナリティであるという。子どもは母親から肉体的に独立した。しかし、現実の生活には、この時期は、完全に母親に依存する存在であり続けている。従って、子ども

は母親を他者として認知することはできず、自分と母親を一体と捉えている。そのために、認識においては母親の役割を自分との相互作用の対象として分離することはできないのである。この時期の子どもにとって母親は自分自身である。

### ii 二単位パーソナリティ

トイレット・トレーニングに象徴されるような他者からの期待の変化は、口唇依存期の安定状態に破壊をもたらす。その作用者である母親は、今までの子ども自身の意のままにはたらく存在ではなくなった。少し大きくなった子どもに対して、母親は自律行為を要求するようになる。その最初が排便のしつけである。排便を自分で処理できるようになることは、以後の社会生活の上で自身にとってきわめて重要なことである。と同時に、母親にとっても早い時期に身につけて欲しい事柄である。しかしながら、子どもにとって、この親からの期待は容易には学習できず、失敗を繰り返すことになる。社会化の作用者(ここでは母親)は、成功すれば肯定的裁定としての賞を与えるし、失敗すれば否定的裁定としての罰を与える。賞は子どもに快を、罰は反対に不快を与えることで排便の習慣が次第に形成されてくる。それは、初歩的ではあるが自律の段階に踏み込んだことを意味する。

口唇依存期の完全な受け身の位地から子ども自身から母親に対するアクションがはじまる。母親に微笑みかけたり、母親の要求に応えることによって母親を喜ばせる行為の主体(acter subject)としての役割を演じることができるようになる。パーソンズはこのような母子間の行為の交換を子どもにとっての厳密な意味での社会的相互作用と見なす。母と子とが「行為の主体」を交代することができるようになって初めて、両者は社会学的な意味での相互作用(interaction)を行っているといえる。

肛門期の危機を克服した子どもは、第2の安定期である愛着期に移行する。子どものパーソナリティ構造内に母親は完全な自我とは別的人格として位置づけられ、相互作用の対象となっている。そのことから、パーソンズは子どものパーソナリティ構造を二つの単位からなると推定する。この段階では同じ家族である父親や兄弟姉妹は子どもにとって、緊密な相互作用の対象ではないため明確な役割が認知されない。おそらく母親の背後に重な

り合った存在としてしか認知されていないであろう。母親は独立した人格として認知されるが、子どもにとっては、最も「重要な他者」であり、同一化の対象である。

iii 4単位パーソナリティ

3才くらいになると、子どもは急激に心身共に発達する。語彙が増し、行動範囲も広がる。身体的に発達した子どもにたいして、家族は役割期待の水準をさらに上げる。仮に「社会化される者 (socializee)」を男児であるとすれば、子どもが躓いて転んだりすると、親から「男の子でしょう、泣いちゃいけないよ。そのくらいがまん、がまん。」などという声が掛けられるようになる。以前には、転ぶとすぐ駆けつけてきて、抱っこしてくれたのとは変貌した親の姿に、子どもは遭遇する。

また、悪戯する子どもを注意したり叱責する人として、父親が母親に代わって登場する。ここで初めて子どもは、厳しい社会的統制者としての父親の存在を認識するのである。さらに、父親の家族内での役割や自分に対する期待の基準が母親と異なることをおぼろげながら理解するようになる。それは明らかに母親とは異なった種類の役割行動である。さらに、「男の子でしょう、お父さんのように強くなりなさい。」と繰り返されることで、自分が母親ではなくして父親と同じカテゴリーに分類されることを認知するようになる。

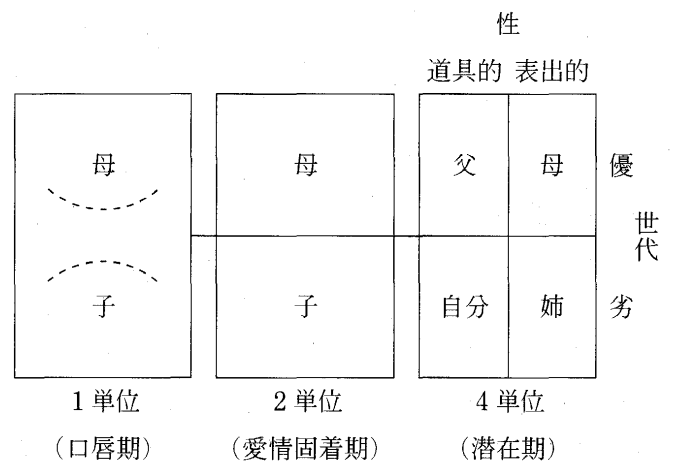
このとき、先の、愛着期に確立した母親との同一化を解き放つこと、そして父親との新しい同一化が期待されていることに気づく。すでに述べたように同一化には2種類がある。一つは発達同一化 (developmental identification) であり、今ひとつは防衛同一化 (defense identification) である。前者は、好意的感情から同一化したいと思う対象への同一化であり、後者は社会的統制を加えてくる相手から身を守るために、相手と同等の力を付けることで攻撃に対処するための、相手(対象)への同一化である。前期、愛着期の同一化の対象は母親であり、「愛される人への同一化」つまり発達同一化であった。4単位パーソナリティへの発達、子どもにとって、同一化の対象を母から父へ移行させなければならない社会的要請に遭遇しているのである。従って、ここでは、前愛着期とは異なる種類の防衛的同一化が生じるのである。愛着期に確立した同一化の対象を移

行する過程こそは、フロイトがエディプス危機として子どもの発達において、最も注目した精神分析学上の発達期である。このエディプス期を無事通過すると、子どもは第3の安定期である潜在期に移行する。エディプス危機を誘発する家族集団の子どもへの社会統制は「許容」「支持」という前の時期のものとは異なり「相互作用の拒否」という用語で記述される。制裁や否定的統制が色濃くにじみ出ている。

小学校高学年の頃までは、この潜在期にあたり、子どもたちは明るく外向的で、次に訪れる思春期に至るまでは人生の中で最も安定した精神状態にあると考えられている。エディプス期を超えたとき、パーソナリティ構造は4単位に分割されている。子どもには、父と母、自分(男児)と姉(女児)との弁別ができるようになる。核家族の役割のすべてが内面化され、各役割単位間の機能的関連の中に自分を位置づけることができる。それは、家族の一員として、子どもの立場で適切な判断と行動ができるように社会化されたことを物語るものである。

以上のパーソナリティ分化の段階を図示すると「図4 パーソナリティ構造の発達」の通りである。世代を軸とした優位・劣位がまず生じ、続いて性を軸にした分化がエディプス期に起こる。

図4 パーソナリティ構造の発達



iv その後の社会化

家族集団のすべての役割を内面化した子どもはその後いかなる発達をするのか。パーソンズはパーソナリティ構造のその後の分化(発達)について、パターン変数によって説明している。パーソンズは、家族集団を超えて

次の段階の子どもの認識発達を、普遍主義—個別主義の変数によって生じると考える。(注2 パターン変数参照)

子どもが4才から5才にも成長すると、他の家族の子どもたちとの交流が始まる。自分の家族以外の成人や子どもたちと顔を合わせ付き合うようになる。子どもの認識はこのとき大きく発展する。自分の家族と他人の家族という新しい枠組みができると、同じ成人男性でも自分の家の場合には自分の父親であり、他の家族の成人男性はとなりのA君の父親ということになる。それまで単なる父親としての属性を与えていた自分の父親がもう一つの側面として成人男性という属性を所有することになる。成人男性という概念は普遍主義的であり、私の父親という概念は個別主義的である。われわれ家族とそれ以外というカテゴリーによって子どもは同一の対象から分析的に二つの属性を識別することができるようになる。その認識は家族内での役割の内面化だけでは起こらない。他の家族との子どもの相互作用によって初めて生まれる、というのである。この認識様式は子どもたちが、学校で学習する算数のような教科の認識様式の重要な基礎となる。例えば、「リンゴが5個とミカンが3個あります。みんなで幾つになるでしょう。」という問題に対して $5 + 3 = 8$ という計算をするのは、リンゴとミカンをまず果物という普遍主義的概念で括らなければ、同一の属性として加法の式に当てはめることはできない。個別主義の認識様式のみでは、あくまでリンゴは5個、ミカンは3個でしかない。ピアジェの有名な発達概念「具体的操作の段階から形式的操作の段階へ」を役割の内面化によって説明したものとイえるであろう。形式的操作の段階が来なければ、子どもたちに算数を教授しても理解は難しいであろう。したがって、多くの国において、学齢期は5才から6才となっているのではないか。家族の役割構造が内面化され、さらに家族以外の人たち(友達とその家族)が子どもにとって重要な他者(significant others)として認識されるようになるとはじめて、自分の家族と友達の家族とを識別する思考様式が必要になってくる。その必要性が、次のより複合的な役割構造の内面化を生起し、その役割構造をもとに、形式的操作の段階ないしは普遍主義的思考の段階へと発達する。

以上が、就学前後までのパーソンズが展開した子ども

の社会化パラダイムである。このパラダイムはフロイトをはじめ、G.H.ミード、C.H.クーリー、J.ピアジェ、O.H.マウラーなどの社会化概念を包含しており、伝統的な20世紀前半の社会化理論の集大成といえる。それと同時に、パーソンズのAGIL図式が家族という小集団に対しても適用可能であることを証明している。

### III 社会化分析のパラダイム転換

自然科学であれ社会科学であれ、科学的研究は普遍妥当性を追求する。ところがそれらは、常に研究者の置かれた状況に規定される。自然科学の研究でさえ科学者の経験の中でしか創造することができないのではないか。万有引力の法則で説明が付く人間の生活世界と量子力学でなければ説明が付かない水準の生活文化がある。天動説で十分だった生活世界と地動説でなければうまく機能しない生活世界がある。人間の文化や生活世界が高度化するにしたがって従来のパラダイムは適用できなくなる。このパラダイム転換は社会科学の分野にも起こっている。

パーソンズの社会化論は1950年代前後までのアメリカのキリスト教社会の典型的な社会集団を背景にして組み立てられている。そこには家族がいて、核家族が責任を持って子どもたちの出生と養育を行っている。さらに、少し成長すると、子どもたちは仲間集団において異年齢集団の生活を体験する。次には学校に入学して、教科の学習をする。それが当たり前であるような、子どもの生活世界を想定した社会化論である。それは又、20世紀の日本の大半の子どもたちにとって当てはまる社会化理論であった。現代はどうか。パーソンズの社会化のパラダイムは、やはり依然として多くの子どもたちに適応可能であると考えられる。しかし、例えば、「児童虐待」「親の子育て放棄」などが云われ、社会化の母胎である家族集団の崩壊が多発し社会問題化すると、パーソンズのパラダイムでは解釈できないしかも重要な部分が現れる。

例えば、「家族崩壊」を背景にした子どもの社会化について、パーソンズのパラダイムでは、その子どもが逸脱行動者となった場合、「家族崩壊」自体が社会化の失敗をもたらした、ということになるであろう。しかし反対に、逸脱行為者にならなかった場合は、パーソンズパラダイムはどう説明をつけるであろうか。おそらく、彼

の家族は崩壊したがそれに代わる「疑似家族」が存在して彼の社会化を正常に展開させた、ということになるであろう。しかしこれでは不十分な解釈であるといえないか。当人がどのように考え、正常な社会化の結果得られると同様の社会への同調行動をとっているのかは、ほとんど説明されてはいないのである。「家族崩壊」という「異常性」によって子どもに何がもたらされ、彼はそれをどう克服したのか、又は克服しないまま、同調行動をとっているのか、同調行動の背景に存在するものは何か、を分析することなしに、「家族崩壊」に出会った子どもの社会行動を理解したとは言えない。しかも、「家族崩壊」が社会問題化してくると、さらにその社会化問題の解明が求められる。繰り返しになるがパーソンズ社会化論では、「家族崩壊」は子どもの社会化の失敗を生み出す元凶であり、健全な子育てのために早急に家族崩壊を健全家庭に復帰させよということになる。このこと事態誤りではない。そうできればそれに越したことはない。しかし、誰も好きこのんで「家族崩壊」をさせるわけはなく、あらゆる努力の末に、どうすることもできないで「家族崩壊」に至ったのではないか。そうであれば、そう易々と元の健全な家族に復帰できるはずはないのである。

「家族崩壊」はパーソンズの社会化論にとって出発点においてマイナスイメージである。しかし現実には色々なレベルの「家族崩壊」が多発している。「家族崩壊」とまでは行かないまでも、父親役割の不在、母親役割の不在、兄弟姉妹役割の不在など、現代の我が国には核家族自体が家族としての形態を希薄化している。その典型である「家族崩壊」の子どもの社会化分析は大変重要であるといえよう。

田中理絵は著書『家族崩壊と子どものスティグマ』において、象徴的相互作用論、現象学的社会学、ラベリング論、エスノメソドロジーなど、解釈的パラダイムの方法論によって、「家族崩壊」の子どもの社会化過程を解析している。その中で、児童養護施設に入所することによって自己を子どもは「異常な状況におかれた者」として認知すること。その自己の異常性を承認することによってのみ、正常者となることが出来る点をインタビューを駆使して明らかにしている。結婚して形成家族（family of procreation）の一員となっても、「自己の

異常性」というスティグマを消し去ることはできない。「崩壊家族」の子どもが逸脱行為者になるのは、このような自己認知と関連するのであり、たんに社会化の失敗では、なんら問題の解決にはつながらない。さらに多くの「家族崩壊」を背負っていながら逸脱者にならないで生きている者は、社会化が成功したのではなくて、自己の異常性というスティグマを引きずりながら自己の異常性を受け入れることによって社会集団の成員として正常に生きているといわれる。これは、「家族崩壊」を経験した子どもの側からの分析である。<sup>(4)</sup>

パーソンズの社会化論はけっして不要というのではない。成人によって社会に「家族崩壊」が起こらないようにあらゆる努力をしなければならない。社会学的レベルにおいて、「家族崩壊」を起こさせないようにという提案はいくらしてもし過ぎることはないであろう。他方において、「家族崩壊」を背負った子どもには何が必要なのか、児童養護施設への入所というラベリングをどうすれば良いのか、児童養護施設はどうあればよいのか、などの問題に答えるためには、解釈的パラダイムからの解釈は当事者の立場から社会集団に対して行われるべき期待や要望を明らかにするのである。パーソンズの理論を補完する為には有効な知見をを解釈的パラダイムは提供する。

パーソンズの社会化パラダイムは、ある一定の価値志向を制度化した社会体系が、子どもの社会化にどのようにしてその価値志向を内面化させるかについて説明したものである。ある社会体系において普遍的な価値志向を社会の側が社会化するメカニズムの説明である。共通項としての価値志向の析出はできるが、そこでは、同じ価値志向に基づいて行動する各個人の内面の問題は捉えられていない。解釈的パラダイムは、社会的価値規範に同調する行動をとっている個人においても、「家族崩壊」という背景を背負っているものは、自己の異常性を認めつつ合規範的行動をとっているという事実を明らかにする。「家族崩壊」を身をもって体験していない者とは、全く異なる心的構造を明らかにしているのである。解釈的パラダイムは、自らが置かれた社会に対する個人の主観の側からの心的状況を分析してみせる。規範的パラダイムは、同一社会体系内の個人に共通する価値規範の体系を明らかにする。パラダイムの転換ではなくして、両



パラダイムの併存こそが社会理解を豊かなものにするであろう。(本稿の前半部は、高旗正人「パーソンズ」高旗正人・讃岐幸治・住岡英毅編『人間発達の社会学』アカデミア出版会、1983年、85-106頁を加筆修正したものである。)

〈 注 〉

1) AGIL図式は、パーソンズとベイルズが創り上げた行為空間の4つの位相次元である。全体社会的レベルではA経済の体系、G政治の体系、I統合の体系、L文化の型と動機づけの体系、価値体系のレベルでは、A経済的価値、G政治的価値、I統合価値、L文化的価値ということになる。さらに、集団に与えられた課題を遂行する場合の集団の位相運動はA-G-I-Lの方向に、社会化・社会統制の場合は、L-I-G-Aの順で位相運動が行われるとされる。この図式を持って行われる社会集団の分析が構造機能分析である。例えば、日本の現代の価値志向はどこにウエイトが置かれているかを見ると、経済価値であるとすれば、A次元が肥大化し、それによって他のすべての位相が影響を受けるであろうといった分析が行われる。

AGIL図式

A	G		
適	応	目	標達成
潜	在	統	合
L	I		

A=Adaptation  
 G=Goal Attainment  
 I=Integration  
 L=Latency  
 tension management  
 pattern maintenance

2) パターン変数とは、パーソンズが創り出した社会構造の分析用具である。1951年の『行為の総合理論をめざして』において、行為理論の準拠枠から導き出された5組の変数を明らかにしている。このパターン変数は、パーソンズによれば、「役割の構造を、社会体系の中で制度化されている価値の分析と結びつけるために、社会的役割におけるオリエンテーショ

ンの様式の分類を行おうとしてつくられた。」とされる。その出発点は、テンニースの「ゲゼルシャフトとゲマインシャフト」の区別であった。ただよく考えると、この2分法の背後には多数の独立に変化する区分がかくされていることが判った。(T.Parsons and J.Smelser “Economy and Society” 1957. pp.33-34. 富永健一訳『経済と社会』I 岩波書店、1958年、54-55頁。) それらをすべて抽出すると次の5組の変数がつくられた。i 感情性-感情中立性 ii 自己志向-集合体志向 iii 普遍主義-個別主義 iv 所属本位-業績本位 v 限定性-無限定性である。

これらのパターン変数は、はじめ、パーソンズの世界社会学研究において社会構造の比較分析に用いられてきた。パターン変数は、いわば文化的な価値志向の型であり、パーソナリティ体系と社会体系の双方に組み込まれる。あらゆる具体的な社会には、一定の価値志向の型(文化型)が社会体系に制度化されパーソナリティ体系に内面化されている。そして、その社会の成員が内面化している価値志向は、これら5組の変数によって分析可能である。つまり、その社会集団がいずれの変数を重要視するかということによって具体的な社会集団の構造的な特色を記述することが可能である。現に、スタッファーは2つの大学に所属する学生がどのような価値志向を持っているかを普遍主義と個別主義のパターン変数を使って実証的に明らかにしている。T.Parsons and E.A.Shils (eds.) Toward A General Theory of Action. 1951, cf. pp.479-496.) そこから、大学が持つ価値志向が学生に内面化されている事実を明らかにしている。

- 3) 佐藤勉訳『社会体系論』325頁、訳注参照。
- 4) 田中理絵『家族崩壊と子どものスティグマ』九州大学出版会、2004年、参照。